

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題	シン・語学教育宣言 ―日本の大学における教養としての第二外国語教育についての覚え書き―
Title	
著者	渡邊 暁
Authors	Akira Watanabe
出典	FLC 言語文化論集 POLYPHONIA, , No. 17, pp. 165-188
発行日	2025, 3

シン・語学教育宣言

—日本の大学における教養としての第二外国語教育についての覚え書き—

渡辺 暁

(WATANABE Akira)

1 はじめに

日本の大学における英語以外の外国語（以下本文では、他大学の事例に言及する時をのぞき、旧東京工業大学の呼称にならって第二外国語と書く¹⁾）の教育は、現在岐路にさしかかっている。個人的な例になってしまいが、筆者が学び、その後15年間非常勤講師を務めた東京大学教養学部では、筆者が学部生であった1990年当時は理系の学生も週に3コマの第二外国語の授業が必修となっていた（英語は2コマ）。その後東大の語学の必修授業は週に2コマとなり（理系の場合：文系はこれに加えてネイティブ教員による「演習」の授業がある）、2016年に授業時間が105分となったのに伴い、前期2コマ、後期1コマとなるなど（同じく理系の場合）、徐々に減少傾向にある。

もちろんその一方で、東大においては、初修外国語を日本語・英語と同様に使いこなせるようになることを目指す、トライリンガル・プログラムが発足するなど、語学教育を強化するための新たな試みも行われているが²⁾、全体的な傾向としては、少なくとも必修科目としての第二外国語の教育は縮小傾向にあると言えるだろう。そして、管見の限りではあるが、そうした第二外国語縮小の方向は多くの大学で見られている。

筆者はこれまで、常勤教員として働いた山梨大学と東京科学大学（旧東京工業大学）以外にも、多くの大学で非常勤講師としてスペイン語を教えてきた。合計すれば数千人の学生を教えてきたはずだが、私が知る限り、スペイン語が話せるようになった学生さんは10人に満たない。と

はいえ、そもそも外国語を専門とする学生さんであっても、必ずしもその言語が話せるようになるのではない、ということを考えれば、この数はそれほど悪くないのではないかとさえ思っているし、たとえこの数字が少なすぎる、と言われたとしても、学生の皆さんには別の形で授業が役に立ったはずだと信じている。

本稿では、現在常勤教員として勤務している東京科学大（旧東工大）、そして非常勤講師として20年近く勤めてきた（現在も勤務している）慶應義塾大学法学部での経験を中心に、日本の大学における外国語教育について、どんな「目に見えない成果」があったのか、考えてみたい。言い換えれば、大学の教育に「目に見える成果」が求められるこの時代において、教養としての語学教育は可能なのか、ということになるのかもしれない。

なお、本稿の執筆にあたり、2024年の後学期に中級および上級の授業を取ってくれた学生さんたちに、「この大学の第二外国語の授業ってどう思う？」という身もふたもないことをお聞きして、率直な意見を言ってもらった。また、筆者が20年近くにわたり非常勤講師として教えている慶應義塾大学でも2024年12月17日、学生の皆さんに「外国語を学ぶ意義」についてグループワークでディスカッションをしてもらい、また授業の課題としてコメントを書いてもらった。（もちろんこの論文で引用する可能性をお伝えし、使ってほしくない方はその旨書いて下さいとお願いした上で行った。）

記名式のアンケートであることのバイアス（筆者のやり方に対して好意的すぎるのではないかと？）について、ご批判があるかもしれないが、その（好意的すぎる）可能性を差し引いた上で、学生さんたちの意見としてお読み頂きたい³。

2 本稿執筆の動機：教養としての語学教育はまだ可能か？

大学での授業を大雑把に「専門科目」と「教養科目」に分けたとすると、語学科目はどのように位置づけられるのだろうか。なぜこのようなこと

を考えると、もちろん単純な専門と教養の二分法でいえば語学は「教養科目」であろうが、それとともに「実用科目」という性格も帯びているためである。

筆者は以前、2015年、東京大学最後の文科三類2年後期のスペイン語の授業を担当するという貴重な経験をさせて頂いた。その授業についての報告（渡辺 2017）の中で、上記の東工大・科学大執行部の先生方の外国語教育に対する理解の原点となったような、二つの「教養としての外国語学習の重要性」についての主張を引用した。1つは英文学者・翻訳家の中野好夫が戦前、東京帝国大学で教鞭をとっていた当時（1938年）に発表した論考である。中野は英語を学ぶ意義として、自身の学習プロセスを振り返りながら、英語の本を読むことを通した知的欲求の充足と、それに伴う「教養的完成とか世界的視野の拡大」をあげた（中野 1979）。そして21世紀に入り、山本（2014）は東京大学教養課程の新英語教科書の導入にあたって書かれた文章の中で、東大が目指すのは「教養英語」、つまり教養を重視した英語教育であり、「実用英語」教育ではないとさえ述べている。

この山本の主張が、新カリキュラム導入から10年を経た東大でどのように扱われているかも興味深い。それ以上に、理系の学生がほとんどを占める東京科学大において、どの程度応用可能なのだろうか。つまり、理系の学生にとって語学の授業というのは専門科目と同様に大学生として学んでおくべき教養を学ぶはずの科目であるはずだが、それと同時に語学は彼らにとって、英語の場合であれば特にそうだが、論文を読んだり書いたりし、学会発表をするための、そして将来エンジニア・医師としての活躍するためのツールでもある。そうした実用性が過度に重視されるようになったとき、語学科目はどのように変容していくのだろうか。あるいはそもそも生き残れるのだろうか。

その一方で、本学で仕事をしていていろいろなところで耳にするのが、本学の執行部の先生方には第二外国語教育について理解のある先生方が多い、ということである。その理由はやはり、現在大学のトップに

いる先生方が、自身が学生だった時代に、例えば東工大でいえば、ロシア語の江川卓先生のような素晴らしい先生方のもとで、原文でトルストイの小説を読む（江川先生自身が翻訳もしている）といった貴重な経験をしたことも影響しているという。しかし現代の大学において、こうした教養としての語学教育は、今も可能なのだろうか。

本稿の執筆動機は、以上のような今後の東京科学大における第二外国語教育の今後、あるいはさらに大風呂敷を広げれば、大学における英語を含めた語学教育はどうなるのか、について論じること、あるいは少なくとも、現時点における自分の考えをまとめておくこと、である。つまり本稿は、旧東京工業大学と旧東京医科歯科大学と統合して、2024年10月に発足した東京科学大学において今後どのように第二外国語科目が全体の教育に貢献していけるのか、についての、現時点での筆者の思考の過程と言うことになる。もちろんこれは筆者個人の意見であり、リベラルアーツ研究教育院の外国語セクションを代表するものではない。

3 第二外国語を学ぶことの意義

本稿を始めるにあたって、第二外国語を学ぶことの意味についてまずは確認しておきたい。筆者自身もちろん自らの教育実践の中で考えてきたことであるが、ここでは二人の識者の意見を紹介しておく。最初に紹介するのは、本学政治学教員の中島岳志先生の発言である。中島先生は大阪外国語大学でヒンディー語を学んだあと、インド政治そして日本政治の研究をされているが、外国語学部からキャリアをスタートされたということもあり、筆者が担当する「外国語への招待」の授業に2度ほどゲストとして参加して下さったことがある。

そのときに中島先生が話して下さったのは、「大学に入った段階で、言葉の成り立ちを考えながらその言語を学ぶこと」の重要性であった。ネイティブとして身につけた日本語でも、小中学校からあまり文法などについて考えることなく学んだ英語でもなく、自分の意思で選択し、そして「大人」になった段階で、それまで培ってきた思考力を使って、考えな

がら言語を学ぶことが、学生にとって非常に重要な学びをもたらすのだ、ということを、ヒンディー語の「与格構文」などの例をつかってわかりやすくお話し下さった。

また、人類学者で東大教養学部の学部長を務める森山工先生（ご自身もフランス語の授業を担当されている）も、新入生向けの外国語教育のパンフレットで、以下のように書いている。

ではなぜ大学入学後に新たにもう一つの外国語を学ぶ必要があるのでしょうか。確かに、一つの外国語の学習経験さえ持てば、言語によって文法構造が異なるのみならず、単語も決して一対一に対応しないことにも気付くでしょう。しかし、特定の外国語を一つ学習しただけでは、母語とそれとが異質であることは認識できても、第三の言語を学習しなければ、人間の言語の多様性は感得できません。測量法に三角測量がありますが、ここでみなさんが習得するのは言語の三角測量であり、ひいては文化の三角測量です。さらにいえば、それは「三角」で完結してよいものでなく、四角測量、五角測量、等々に展開・拡張されるべきもののなのです。

大学教育における良質な異文化体験として、外国語学習に優るものはありません。言語を通じて論理的思考、規範的評価を行う人間にとって、言語はその文化的アイデンティティの核心をなすものです。それゆえに、言語によってどのような主張を行うにせよ、文化圏を超えて通用する説得力を持つには、言語表現の持つ精密さに敏感でなければなりません。教養学部において外国語を学ぶ機会を得た皆さんには、それだけの語学力を身につけて多文化共生の人類社会において豊かな人生を生きてもらいたいと願います。

ここで紹介したお二人の意見に代表されるように、第二外国語を学ぶことにはさまざまな効用があるが（筆者自身の考えについては、本稿の

結論部分、そして渡辺のこれまでの教育論（渡辺 2012, 2017, 2021）を参照されたい）、その一方で、実際の科目の運営には様々な制約があることも事実である。次節以降で、それらの制約あるいは問題点について考えていきたい。

4 第二外国語教育の難しさ：学ぶことの大変さと成果の見えにくさ

前節で述べたような重要性に比して、第二外国語教育の実践は難しい。その一番の理由はおそらく、第二外国語教育の成果が見えにくいことだ、と筆者は考える。語学の習得は大変な作業であり、さまざまな新しいことを学ばなければならない。もちろん言語にもよるが、発音も違えば、文法構造も違う。例えばスペイン語では、「こんにちは (¡Hola!)」程度であればともかく、「(あなたは) お元気ですか? (¿Cómo está usted?)」「はい、(私は) 元気です (Estoy bien.)」といった簡単なやりとりであっても、動詞を主語に合わせて変化させなければならない。そしてもちろん、文法を学ぶのと並行して単語を覚えて語彙を増やしていかなければ、言語はできるようにはならない。

こうした語学教育そのものの大変さに加えて、大学における語学教育は、様々な制約の中で運営されている。一番の問題はもちろん時間的な制約で、週に数回の授業（科学大大岡山キャンパスの場合、必修は通年週1回⁴⁾）であり、専門の勉強で忙しい中、この程度の時間数で目に見えるような進歩を遂げるのは難しい、という事実である。初めて学ぶ外国語に対し、最初はモチベーションも高かった学生も、覚えることの多さや文法の複雑さ、そしてその成果がなかなか見えてこないことに幻滅して、意欲を失ってってしまう。特にスペイン語は、「発音が比較的日本語母語話者にとって簡単である」ということ（これは確かに事実だと思う）から、「スペイン語は簡単である」といった言説が一人歩きしてしまい、動詞の変化形が多数ある、ということをはじめ、学習差の大変さを知ること、あきらめてしまう学生も多い。

なお、常々考えていることだが、「言語ができるようになる」という目

標は、様々なレベルがあるが、例えば、言われたことがすぐに理解でき、それに対して反射的に答えを返せる、といったレベルに達するまでの学習量の「臨界質量 (critical mass)」は、一般に考えられているよりもずっと大きい。つまり、ある言語をある程度しっかり勉強していたとしても、「こういうことができるようになった!」という目に見える成果は、あまり出てこない。特に「話す」という、現在の言語教育において重視される「成果」は(文章を見たり音声を聞いたりして、一部にわかる単語がある、といったものも「成果」に含めてもらえるのならともかく——実際こうした経験を喜んで報告してくれる学生は多いのだが——)、目に見える形で出てこないのである。語学学習という営みのこの点は、恐らくスポーツに似ているだろう。がんばって練習してもなかなか自分の思うようにできなかったことが、ある日突然、できるようになるのだが、そこに至るまでには長い道のりが必要なのである。

もちろん、「これだけの語彙と文法事項を学べば、こういうことは言えるようになる」ということを、語彙や文法のレベルを限定してしまえば、その目標に比較的短い時間で到達することは可能であろう。ただし残念ながら、生きたスペイン語を聞き取ったり、自分の言いたいことを表現したりするためには、さらに様々な努力が必要なのである。また、学生さんが優秀であるほど、自分が言いたいことと自分の語学力で表現できることのギャップが生じると言うこともある。

そのように、語学ができるようになるというのはなかなか難しいことだが、難しいと嘆いてばかりいてもはじまらない。次の2つの節では、限られた知識と時間を最大限に生かしての、科学大と慶應での中上級の授業の様子と、受講生の声を紹介させて頂く。

5 筆者自身のスペイン語教育①:

スペイン語の中上級科目そして受講生の皆さんの声

スペイン語の選択科目(ここでは中級と上級+文化演習に話をしぼる)は、現在水曜日の午後に開講されている。2024年度の履修者は残念ながら

ら少なく、後学期は第3Qこそ7名ほどの受講生がいたものの、第4Qは3名しか受講生がおらず、しかも学部の中からスペイン語を履修し、上級科目を履修してくれているのは2名だけである。この数字だけを見る限り、スペイン語初級の授業は、中上級に進むだけの魅力を感じさせないもの、ということになってしまうだろうが、本節ではその見方に対する反論を試みたい。なお、2名のうちの1人は、学部2年生だった頃から一貫してスペイン語の授業を取ってくれていて、今や本学スペイン語プログラムの生き字引のような存在であり、今年度も大学院のスペイン語の授業（「スペイン語文化演習1-4」）を確実に履修するために、時間帯が重なっている文系教養科目は抽選対象から外した、というくらいの熱心な学生さんであり、もう1人の学部生の方も、初級の授業の頃から毎週授業後に質問に来てくれるなど、非常に熱心に受講してくれている方である。彼ら2名と、他大学から修士課程に入られた、メキシコ滞在経験のある、やはり大変熱心な学生さんの3名で、スペイン語の文法をしっかりと復習しつつ、簡単なスペイン語の文献を読み進めたり、音声の聞き取りとその内容の読み解きを行ったりと、充実した授業を行っている⁵。

彼らに「スペイン語の選択科目ってなんで受講生が少ないのかなあ？」と身も蓋もない質問をしたところ、やはり他の授業やサークル活動で忙しい（水曜日は多くのサークルが活動している）、という答えが返ってきた。月-木・火-金のリズムで専門科目を中心とした授業が組まれているため、水曜日は彼らにとって一番融通の利く曜日であり、そこでわざわざ語学を学ぼう、という学生さんはどうしても少なくなってしまう。さらに言えば、そういう高いモチベーションを持って語学に接してくれるポテンシャルのある学生さんの場合、他にもたくさんのやりたいことがあったり、場合によっては専門科目のゼミが水曜に入ってしまったたりして、来られないというケースも多いのである。（クォーターによって受講したりしなかったり、という学生もいるため、年間を通してのプランが立てにくいという問題点もある。）

教員目線で学生の考えを想像するに、単位や成績のインセンティブが

全くないことも、影響が全くないわけではないように思われる。もし語学科目も文系教養の単位に使いたりするのであれば、もう少し受講生は増えるのではないかと思うし、中上級は当然成績も辛めなのではないか、というイメージで受講生が減っているのだとしたら、それは非常に残念である（逆に、会話初級の授業に、モチベーションがあまり感じられない、しかもスペイン語未履修の学生が複数いた年があり、はっきりとしたことはわからないが、もしかすると会話の授業が「楽勝科目」であるとの噂が広まってしまったため、成績平均を少しでも上げようとした学生が受講したのではないか、という可能性を疑っている。）

このように、第二外国語の科目は様々な問題点を抱えているが、受講してくれる熱心な学生さんたちのおかげでなんとか成立していて、彼らのために（彼らのレベルに合わせたという意味で）オーダーメイドの授業を展開しているのである。

5 筆者自身のスペイン語教育②：

慶応法学部での授業と学生の皆さんの声

この文章を書くにあたって、前節の東京科学大の学生だけでなく、非常勤として教えている慶應義塾大学でも学生に話を聞いた。

慶應法学部においては第二外国語は1年次と2年次に週2回、合計8コマの授業が必修となっており、これ以外に週4回のスペイン語の授業がある「インテンシブ」コースも設けられるなど、充実したプログラムとなっている。1年生で文法を一通り終え、2年生でその知識を使って、何らかのテーマに沿って文章を読んだり、動画を見たり、あるいは作文をしたりする⁶。筆者は2007年度にはじめて担当して以来、この授業を続けさせてもらっているが、ここでは「スペイン語の文法を学び直すことで理解を定着させること」、「ラテンアメリカの社会や政治について学ぶことで、学生の視野あるいは興味関心の幅を広げ、また自分で関心をもって調べる足がかりを作ること」、そしてできる限り、「なかなか実感はできないかもしれないが、彼らのスペイン語の知識は実際には様々な

形で応用ができるだけのレベルに達していることを認識してもらうこと」を目標としている。

具体的にどのような形でコメントをしてもらったか、について、まずは申し上げたい。筆者が火曜日5限に担当する「スペイン語Ⅳラテンアメリカの政治と社会」という2年生向けの授業で、「皆さんは第二外国語を学ぶことの意義について、そして必修科目となっていることについて、どのように考えていますか」という問いについて、授業の中で30分程度を使ってグループワークをしてもらうとともに、毎回の授業で課しているコメントシートにおいて考えを書いてもらった。(なお、グループワーク中に筆者自身も教室を回り、全てのグループの皆さんと、一言ずつではあるがお話をすることができた。)

ご紹介できるのはごく一部であるが、皆さんのコメントが素晴らしいので、この節については上記の慶應法学部のカリキュラムの概要の説明とアンケートの背景以外には、あえて私からは何の説明もつけず、彼らのコメントを直接引用するのみとする。記名式であることのバイアスを疑う向きもあるかもしれないが、ここまでの授業につきあってくれた皆さんなので、特にこちらの意向に沿うような発言をされているわけではないと考えている⁷。

+++

「大学で2外を学ぶ意義は、はばひろい視点を持って学問に向き合うことと、「言語」そのものを理解することに意味があるのかなと思いました。」

「第二外国語の授業形態は、この授業のように、映画や実際のスペイン語圏の文化を通じて外国語に触れるというような形が、親しみやすくていいと思った。」

「大学にはいると自分で授業を選択することができる中、第二外国語という授業があるのはそれによって視野を広げることができるからであると思っている。」

「わたしはジャズ喫茶でアルバイトをしており、喫茶店で読書をしている人を多くみます。最近、ガルシマルケスの百年の孤独を読んでいる人を偶然にも3人も見かけました。全員ともハードカバーではなく文庫版を持っていたので、最近文庫化で話題になったおかげかなと思いながら、この授業でガルシマルケスを原文で読んだ自分がなんだか誇らしくなりました。」

「大学の授業で、第二外国語というのは英語以外の言語を問う人が多いと思うので、英語以外の言語であることをまず前提とします。

そこで、私が第二外国語を勉強することの意義はその言語が使われている国のことを知ることにあるとおもいます。正直、大学生の2年間で一つの言語を週2で習得するのは、相当の努力がないと無理だと思いますし、他のメインの学部の授業がある中でそれを求められるのもナンセンスだと思います。(もちろん、できたらすごいことです)

言語を学ぶというのは、それがどのような国で使われているのか、どういう口調で話されているのか、国の文化や環境から学ばなくてはならないと思います。私は、言語を話せるようになるには、現地に行くことが1番早い方法だと思っています。しかし、それは叶いませんから、少なくとも教師陣には、自分たちが勉強している言語の雰囲気、バイブスを少しでも生徒に分け与えられたなら、それでももう言語の勉強の意味があったと言えるのではないのでしょうか。決して、文法があっている合っていないだけが、言語の勉強とは言わないと思っています。学生一個人の意見ですが、参考になったら嬉しいです。」

「私が考える第二外国語の授業の意義は、その言語の習得というよりは

その言語を使用する言語圏への理解の増進だと考えている。現行の授業でその言語を読み書きがある程度できるというレベルにまで達するのは難易度が高いと思われるが、文化への理解はいつか世界で活躍するような立場になった際に財産となるべきものであると言えるだろう。また、外国文化への理解は翻って日本という国を客観的に見る際の重要な一歩となりえる。将来自分が置かれる立場に関係なく、他文化への理解は重要なものだと私は考えている。」

「私は英語はまだしもスペイン語などの第二外国語を学ぶ意味は、スピーキングやライティングのスキル面の向上よりも、当該言語圏の文化に触れるきっかけとしての側面が強いのではないかと思います。正直に申しますと慶應大学の2年間のスペイン語の講義のみでネイティブやスペイン語の先生方のようにスペイン語を扱うことは相当の困難を極めるだろうと実感しています。しかし、スペイン語の講義を通してスペイン料理屋のスペイン語で書かれた看板の意味やスペイン語圏のサッカー選手のインタビューを日本語訳ではなくスペイン語で見てみようとする姿勢は間違いなく育まれました。今後よりグローバルになるであろう世界情勢を含め私は外国語学習は非常に重要な役割を担っていると考えます。」

「第二言語を学ぶ意味として、英語が全てじゃないことを学生に気づかせ、視野を広げさせることがあると思います。今の日本の就活などではTOEICといった英語試験で何点以上取りましょうといったように英語が重要視され、英語＝日本以外という認識が作られやすくなっていると思います。実際に私がヨーロッパ旅行をした時、スペイン語しか話せないという人や、フランス語とオランダ語しか話せませんといった人と会い英語が海外の全てじゃないんだと気付かされました。そのような現実気づかせ、視野を広げさせることに第二言語を学ぶ意味があると思います。」

「第二外国語を学習する意味について、私のグループでは二つほど意見が出ました。まず一つ目は、第二外国語を学ぶことで、その国の文化的、言語的背景を知ることができるという点です。それを知っているかいないかで同じ事象に対してもものの見方が変わってくるのではないか、という意見でした。もう一つは、第二外国語を学ぶことで、間接的に英語学習の助けとなっているのではないか、という点です。英語には男性名詞も複雑すぎる時制もなく、相対的に簡単な言語だということに気づくことができました。一理ある意見だと感じました。」

「第二外国語を学んでいなかったら、得られなかった経験がたくさんあることに、今日友達とディスカッションして気づくことができました。もしも第二外国語の授業がなかったり、スペイン語を選択していなかったら、魅力的なスペインの文化に触れていなかったと思いますし、スペイン語圏はスペインだけでなく他にも多くの国があることを知らなかったと思います。そのため、日本以外の国の文化や、言葉ができた歴史などを知るためにも、第二外国語の学習は必要だと思います。」

「新たな言語を学ぶ過程で自然と新たな文化も学べると思うので、視野を広げるという意味で外国語学習は効果的だと感じます。」

「単位数の割に割かなきゃいけないリソースが大きい一方で、言語からその国の文化を感じたり、英語の勉強に活かしたりするのはとても楽しかったです。」

「スペイン語を学んでいて良かったと思えた事例が一つあります。私は慶應でフットサルの講義を受講しているのですが、そこにメキシコ人の留学生の方がいます。彼は日本語を話すことができないのですが私は彼に知っているスペイン語の単語を使ってコミュニケーションを取ろうとしたところ彼はとても喜んでくれてその後も良い関係でいることができ

ています。このようにスペイン語で話すことができずともな会話も成り立たない場合でも単語・文化を少し知っているだけでも大きな差があると実感しました。万国共通で英語が喋られる世界ではないのでスペイン語はもちろん他の言語にも触れてみようと思った瞬間でした。」

——最後にいくつか、多少面はゆいが、私の授業に言及して下さったコメントも紹介する——

「渡辺先生のスペイン語の授業は非常に面白く、今まで学んできたどの言語の授業よりも楽しみです。ただ、学ぶだけではなく、動画などを用いて学ぶことでどういう意味だったのかといったことを自分から積極的に調べようというきっかけになっています。」

「私が質問2のような外国語学習の意味を感じられるようになったのには渡辺先生の授業の影響が大きいです。一年生まではやはり文法がメインの授業でスペイン語には興味があったものの毎週のようにある小テストや期末テストのために勉強をしている感が否めませんでした。そのため学習というよりはテスト勉強に近いものがあり興味のある言語を学べたことはよかったのですが満足感に欠けていました。しかし今年なんとなく資料をみて渡辺先生の授業を取ってみると思っていた以上に文法だけでなくスペイン語圏の文化について知る機会があり、さらにスペイン語に対してまた国に対して興味を抱くことができました。渡辺先生の授業は大学に入ってから本当にとってよかったなと思える授業のひとつです。あと少ししか対面や授業はありませんがよろしくお願いします！」

「正直2年間で第二言語の単語、文法を完全に習得するのは難しいなと感じます。自分の中で大学の外国語学習の意義はその外国語の学ぶ第1歩を踏み出せる機会の提供だと考えていて、自分の中では勉強をばかまじめにやって、テストで高い点数をとる事で単位を取得するという流れ

ではなく、渡辺先生の授業スタイルのような、外国語圏の映画を見たり、文化に触れたり、料理を知る機会があったりと、勉強以外の部分を学ばせてくれる授業が大学であるべき授業スタイルなのかなと感じるし、そっちの方が高いモチベーションを保ちながら学習することが出来るかなと思います。例えば文法を学び、その内容を映画や小説などで説明を加えてくれると言ったような、何か勉強とそれ以外との事に繋がりがあある授業なんかがあると、非常に充実した授業になるかなと感じます。」

「高校生まで外国語学習というと単に文法を学びその言語を話せるようになるための勉強でした。しかし大学に入ってから渡辺先生はじめ、その言語が話されている地域の文化について紹介していただく機会が増え、外国語学習を通して多様性や異なる文化を受け入れる基盤が自分の中で出来ていったような気がします。もちろんそのための準備段階として文法を学ぶことも重要なのですがそれだけで終わるのは外国語学習の意味が大幅に薄れてしまいます。得た知識を活かして映像を見たりお話を聞くことでその国の文化や考え方を知ることができますし、自分の文化との違いもまた感じる事ができると思います。私はこのような点に外国語学習の意味があるのかなと大学に入ってから2年弱で考えるようになりました。」

「私は大学が第2外国語を必修で設けていることをありがたく思っています。しばらく海外でスペイン語を学んでいた身として日本では英語以外の言語を学べる場所は少なく、大学の授業は自分の過去の知識を活かし、知識を増やせる唯一の場所になっています。でも日本でありがちな、先生が一方的に文法などを生徒に説明して暗記をさせ、テストに出すことは私が望む外国語の学習方法とずれていると感じます。強制的に情報を生徒に暗記させることは受け身にさせるし、実践に移しづらいし外国語を学んでるという実感が湧きにくいと思います。生徒を受け身にせず、外国語を学ぶ様に仕掛ける渡辺先生のような授業形式は外国語を

楽しく学び、それによって吸収している、という実感が湧きやすい授業だと感じます。今日の授業も自分の過去の知識を活かして新しい知識を得たと思います。楽しかったです。

ありきたりな回答かもしれませんが先生の論文に役立てばいいです。」

6 第二外国語が必修科目であることの意義

第二外国語については、当然のことながら、必修である必要はない、という議論があり得るだろう。必修科目の運営は大変な作業であり、また必修だから取らされている、というモチベーションが高くない学生も多い。それなら語学科目は選択にし、本当に勉強したい学生にだけ取ってもらえばいい、という考え方もあるだろう。しかし、私はその見方は非常に危ういと考えている。

まず、もし語学が実際に必修科目でなくなるとすれば、それを入り口にして外国語学習の魅力を知るかもしれない学生が、そのチャンスを奪われてしまうことになる。実際に第4節で紹介した、現在も熱心に中上級の授業を受講して下さった学生さんたちも、スペイン語を勉強し始めた最初のきっかけは、必修科目として授業があったからだと言っている。もし必修でなかったら、彼らのような熱心な学生さんたちでさえ、中上級の授業に来てくれることはなかっただろう。

また、語学を学びたい、というモチベーションを感じる学生の多くは、留学が決まった、というケースであるが、留学が決まってから語学の勉強を始めてもなかなか自分が求めるレベルまでは到達することができない。理系の皆さんの場合、研究自体は英語でなんとかなるし、生活のために現地語も「できたらいいな」と思っても、なかなかできるようになるまでのハードルが高い、という厳然たる事実が、ここでも影を落としていて、わざわざやらなくてもいいか、となってしまうのである⁸。

だからこそ筆者は、第二外国語を必修科目として入学後のなるべく早い段階でやっていくことの重要性を主張したい。もちろん実際に必要となる言語が、第二外国語でやっていた言語とは別の言語となる可能性の

方が高いが、一度何か英語以外の言語を学んだ経験は、別の言語を学ぶときに必ず生きる。例えば本学ロシア語教員の河村彩先生も、「外国語への招待」の授業の中で、最初に学んだ第二外国語はドイツ語だったが、その経験はあとからロシア語を学ぶときに大いに役立った、とおっしゃっている。

必修かどうか、については、筆者はやはり、第二外国語は一定以上のレベルを目指す大学にとって、必修であり続けるべきだと、実際にその授業を担当する人間としての願望も込めてではあるが、考えている。選択式にすることでモチベーションの高い学生を集める、というのは確かに一理あるが、単位などのインセンティブが全くない中で、希望する学生だけを集めて授業を展開することはなかなか難しいように思われる。おそらくそう遠くない将来、「これしか学生がいない語学教育は非効率だ」とされてしまうように思う。

大学運営における第二外国語教育という科目の「問題点」は、成果が見えにくいこと（あるいはいわゆる「タイパ」が悪いこと）だけではない。むしろ「外国語教育の良さ」が問題視されてしまう可能性である。その「問題視されてしまう外国語教育の良さ」とは、私が考えるにその多様性である。多様性という言葉で筆者が表現したいのは、同じ授業をしても学生によって受け取り方（どの部分に関心を持ったか）が違いうだろうし、また同一の文法事項を教えるにしても、教員によって例文や重視する内容など、教えることが違いうだろう、ということで、いくら統一のカリキュラムを作ったとしても、その中でさまざまなバリエーションがある、ということである。いうなれば、語学の授業というのは「工業化しにくい」製品であるわけだが、それ自体、筆者自身は当然であると考えていても、大学の別の部署の先生方からすると、なぜ同じ科目なのにそのような差異が出るのだ、という批判も出てくるだろう。

筆者はその一方で、このままの語学教育で学生さんたちや他の部局の先生方の理解を得られるのか、という危機感を持っている。当然のことであるが、教員は全員、語学ができる人たち、つまりネイティブスピー

カー以外は、学習の成果のおかげで語学ができるようになった人たちであり、「語学ができるようにならなかった人たち」は教壇に立つことはないが、これは考えてみると、かなりのバイアスではないか。教員はどうしても、自分自身が経験してきた学習のプロセスにとらわれてしまいがちだが、大学における第二外国語教育というのは明らかに、多くの教員の学習の過程とは別物である⁹。従って、教員の側が学生に対してどの程度彼らのニーズを理解し、また語学の授業を通して何を教えようとするのか、あるいは「どのように学生の思考を変えていこうとするのか（特にモチベーションの低い学生に対し、モチベーションを持ってもらうのか）」を考えることも、とても重要なことなのではないだろうか¹⁰。

結論：これからの第二外国語

これからの第二外国語教育はどうあるべきなのだろうか、そして、その重要性をどのようにして、なるべくわかりやすく納得してもらえるような形で、学生の皆さん、そして他の部局の先生方に向けて、訴えていくべきなのか。

実は筆者は、山梨大学に勤務していた2015年、岩手大学を幹事校として開催された国立大学教養教育実施組織会議において、「大学教育における第二外国語の役割」という議題を分科会の議題として提案し、採択されたことがある。そのときには問題提起の形で山梨大の授業の事例を報告したほか、千葉大・大阪大・岩手大の事例について話を聞いた。千葉大では以前から2つの方式の外国語の授業を設定し、少人数の従来型の語学の授業と、教養としての地域研究の要素も取り入れた授業（人数は多めで単位数は前者の半分）を実施していたり、岩手大の事例では、あまり実用性と結びつかないように見える第二外国語が、実は就職に有利に働いている、という話を聞いたり、また大阪大では（もともと大阪外語大と合併した要因もあるのだろうか）劇を取り入れるなどの授業が行われているとの事例もあるとのことをお話を聞いたり、第二外国語教育の可能性について様々な示唆を頂いた（国立大学教養教育実施組織会議

2015、千葉大学五十年史編集委員会 1999)。

筆者が実際に語学教育に携わっている人間として考える第二外国語教育の重要性については、すでに様々なところで書き記してきたが、その中でも重要視しているのは、①スペイン語の文法を丁寧に教えることで、文法がいかに語学の習得に役立つか、その重要性を学生に伝えること、②スペイン語と同時にそれが話されている世界についても話をすることで、学生の皆さんの視野を広げること、の2点である。実を言えば、③最初は全く知らなかったスペイン語が、少しでもできるようになることを通して、学ぶことの楽しさを知ってもらう、という裏目標も、他の大学では重視してきた。それについては、科学大のような大学においては必要ないかと思ってきたが、専門の勉強だけすればいい、と考えている一部の学生に文系科目の大事さを伝えることは、意外と必要なことなのかもしれない。

一つ付け加えておきたいことは、外国語の授業において「この授業がなければ出会わなかったこと」がいかに多いか、ということである。言葉は生活と密着している。筆者は研究者としては、メキシコの政治そして同国から米国への移民を研究するフィールドワーカーである。本稿を書いて初めて気づいたことだが、そうした学問的形成を背景として語学を教える中で、筆者は無意識のうちに、自分の現地体験を伝えることで、異文化に触れ、あるいは他者と交流するなかで自己形成を進めていくことの重要性を、学生に伝えようとしていたのかな、ということに、(自分自身も、本来であればスペイン語だけでなく、調査地ユカタンで話されている先住民言語のマヤ語を学ぶべきであることを棚に上げつつ)気づいた次第である。

今後の教育方針としては、とにかく学生の考えとニーズをとらえつつ、彼らの希望に内容を合わせつつも、教員の側でこれは教えるべき、という信念を持って(「その信念があるからこそ、学生の希望に合わせることができる」という言い方も可能であろう)、授業をそしてカリキュラムの整備を進めていくしかないのではないだろうか。自分自身の実践を

続けつつ、このような媒体を通じてその経験をまとめることで、これからの本学及び日本の大学における、第二外国語教育に微力ながら貢献できればと考える所存である。

注

- 1 大学によっては「未習・未修・初修」外国語と言った呼称が用いられており、「第二外国語という言い方はそもそも英語との重要性の格差を想起させるため使うべきではない」とのご批判を頂いたこともある。
- 2 ちなみにこのトライリンガルプログラムの導入に伴い、筆者が非常勤講師として長くにわたって担当させてもらい、個人的には優秀な学生さんと交流する貴重な機会となっていた「第三外国語中級」という授業はお取りつぶしとなってしまった。この科目の受講生のうち、何人かとは未だに交流があり、各界でご活躍される様子を楽しみにしている。
- 3 これに付随して、少なくともここで意見を採り上げた科学大の学生さんたちは、教員と学生という関係にとらわれず、かなり率直な意見を言ってくれる皆さんであるということ、そして、私自身は授業という空間は、そうした率直な意見を言えるようになる関係を育てる場であると考えている、ということ、その2点を書き添えておきたい。
- 4 ただし熱心な学生には、初級会話の授業が選択科目として用意されており、また春休みと夏休みには3日間の講習（初級・中級・会話初級・会話中級）が用意されている。全国でも有数の、やる気のある学生さんに配慮したプログラムである、と言っても過言ではないだろう。
- 5 筆者の定番の聞き取り教材をいくつか紹介しておく。映像では、2015年スペイン国王杯でのメッシの先制ゴールをはじめとするサッカーの実況や、2020年バロンドール賞授賞式における、最優秀

女性選手 Alexis Putellas 選手のスピーチなどを、読み物でいえば、岩佐めぐみ著『私はアフリカにすむキリンといいます』のスペイン語版の講読や、ガルシア＝マルケス『十二の遍歴の物語』の中から、「序文」「聖女」などをよく活用している。その他、今後も様々な教材を活用できれば、と思っている。サッカー関係でいえば、スペインで活躍する久保建英選手のスペイン語での発言などは、学生のモチベーションを上げるためにも素晴らしい教材になるだろうと考えている。

- 6 筆者の担当が担当している二つの授業には、「ラテンアメリカの政治と社会」および「エクスプレス・スペイン語文法」という副題がついている。前者はタイトル通り、ラテンアメリカの政治や移民について考えてもらう授業であり、後者はスペイン語が苦手な学生に対し、スペイン語の文法を復習した上で、それほど難しくない文章を読ませたり、学生がきちんと内容を取れるように説明をしながら動画の聞き取りにチャレンジしたりしている。なお、前者の授業は1年次の授業でスペイン語の文法をきちんと習得したことを前提としているが、そうはいつても語学は間が空くと忘れてしまうものであり、また1年間で文法を全て終えることはかなりハードルが高いため、こちらの授業でも文法の要点の復習は行うようにしている。
- 7 本稿の校正中、慶應で担当するもう一つのクラスの学生さんからすばらしい授業内容の振り返りのレポートを頂いたので、以下にその一部を紹介したい。

「この授業では、教科書だけでなく、先生の口から、そして動画などから、よりスペイン語圏について知ることができたことが楽しさを感じる理由であったと思う。秋学期の授業で、特に印象に残っているのは映画を観たことである。今までスペイン語で映画を観たことがなく、難しいのかなと予想していたが、ところどころではあるものの、単語が聞き取れて嬉しくなった。音声がスペイン語、字幕

が日本語だったので、文字を読みながら自分の頭で単語と単語を繋ぎ合わせたり、動詞の形や活用形を分析したりしながら見る事ができてとても面白かった。

演技や使われる音楽などにも日本の映画などとは違いを感じられたことが新鮮だと感じた。日本人の感覚からすると少しオーバーに感じるような表現方法だとしてもなぜだかしっくりくること、シーンの展開が早い部分があること、音楽に迫力が感じられたこと、など些細なことも気づくことができた。単なる言語の違いだけでなく、日本とスペイン語圏の文化の違いをも実感できた気がする。(中略) 他のスペイン語の映画なども観てみたいと感じた。

また、先生がメキシコに出張に行かれた後、現地のお話をしてくださったのが印象に残っている。自分が行ったことがない土地でも、先生のようにリアルタイムで経験をしたことや、感じたことなどを教えていただけるのは貴重なことだと感じる。大学で学んだことを活かして、スペインやスペイン語を話す国に訪れて、自分の肌でも感じたいと思った。」

- 8 実際今年度も、10月頃に「スペインに留学することになったので履修したい」と連絡をくれた学生さんが一人いた。その方は1回見学に來ただけでいなくなってしまったが、元旦に再び「多少専門の研究の方で余裕ができたので」と連絡をくれて、1月から授業に参加してくれている。それと同時に、1年のスペイン留学を経て帰ってきた学生さんが、熱心に授業に参加して下さったので、そうした学生さんの留学準備、そして帰国後のさらなる学びの受皿として、スペイン語中上級科目は十分に機能していた、と言いきってしまって差し支えないと思う。
- 9 別の言い方をすれば、「語学を一生懸命やってできるようになった人」である教員が、「そこまで時間も労力もかけたくはないが、少しはできるようになりたい」あるいは「あまりこの科目で苦勞したく

ない、いろんなことを知りたいが、できれば授業は楽しい方がいい」という学生と、どう接するべきか、について、教員はもう少し考えた方がよいのではないか。また、授業の中で、そして多くの場合テストのために、がんばって覚えた知識も、その後語学に接する機会がなければ忘れてしまう。学んだ内容を忘れたあとに何が残るのか、あるいは、何が「実は」残っているのか、を考えることが重要だろうが、それについて追跡調査することはなかなか難しい。

- 10 東大にはこのような厳しいことをおっしゃる先生もいらっしゃる：「一年半ほど前に学生自治会が行なったアンケートで未習外国語(昔の第二外国語)の学習から期待することとしてアンケートに答えた約半数の学生が旅行のためと答えており、この回答が最も多かった。つまり liberal arts とは何かを多くの学生がもはや理解していないのである。また教える側にも問題があり、果たしてこの人に教養教育を担いうるだけの知性と教養があるのか疑わしい教師がちらほら見受けられる。(高橋 2018)」この先生のお嘆きはごもっともと思うと同時に、私なら(自分が最後の一文に書かれた「(駒場で教えることが適格かどうか)疑わしい教員」であったことを自覚しつつ)、彼らのニーズに理解を示しつつ、「そういう学生の認識を授業を通して少しずつ変えていくのが教員の仕事じゃないでしょうか」と思わなくはない。実際、15年間非常勤講師をつとめた経験の中で、優秀な学生がすすくと実力を伸ばしてくれるのと同じくらい嬉しかったのは、最初は見るからに「語学なんてなんでやらされるんだろう？」という雰囲気をもっていた学生さんが、少しずつ授業になじみ、楽しくそしてしっかりと、スペイン語の勉強をがんばってくれている姿を目にしたときだった。

なお、校正の過程で本稿を何度も読み返すうちに痛感したのは、現在の第二外国語の直面する難しさは、第二外国語が教養科目なのかそれとも実用科目なのか(あるいはその両方なのか)、という、科目としての位置づけの問題であり、もし后者であるとすれば何を目

標とすべきなのか、ということである。この問題は「教養教育（そして実用教育）とは何か」という、さらに大きな問題と関連付けて考えるべき大問題であり、いずれ稿を改めて論じたい。

参考文献

- 国立大学教養教育実施組織会議 2015「平成27年度（第52回）国立大学教養教育実施組織会議 分科会報告」未公開資料。
- 高橋宗五 2018「駒場をあとに・惜別の辞に代えて」『教養学部報』598。
- 千葉大学五十年史編集委員会 1999『千葉大学五十年史編集委員会』（<https://www.chiba-u.ac.jp/about/annals/50.html>）。
- 中野好夫 1979 [1938]「語学一如是我観」『酸っぱい葡萄』みすず書房、301-330。
- 森山 工 2023「異文化体験としての外国語学習——外国語学習の勧め」『2023年度外国語の学習について——外国語選択の手引き——』東京大学教養学部外国語委員会 (<https://www.c.u-tokyo.ac.jp/admission/recommendation/2023-gaikokugo.pdf>)。
- 山本史郎 2014「『教養英語』事始め—『教養英語読本』は「英語教育」をめざさない?」『教養学部報』562。
- 渡辺 暁 2012「地域研究者として教える第二外国語——ラテンアメリカ研究とスペイン語教育のあいだ——」『青山スタンダード論集』第7号、107-122。
- 2017「教養教育としての第二外国語教育——東京大学2015年度秋学期（Aセメスター）の授業の記録から——」『高等教育と国際化——山梨大学教育国際化推進機構紀要年報』第3号、28-32。
- 2021「コロナの時代の語学教育——東工大スペイン語の科目立ち上げとオンライン合同授業の記録——」『ポリフォニア』第13号、73-90。